

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一14:6～13 「教会の徳を高めるために」

[6]「ですから、兄弟たち。私があなたがたのところへ行って、異言を話すとしても、黙示や知識や預言や教えなどによって話さないなら、あなたがたに何の益となるでしょう」黙示や知識、預言、教えなどはすべて人々が理解でき、受け入れることができるものであるが、異言はそうではない。異言は恍惚状態で意味不明のことを話すことであり、もしパウロがコリントに行った時、この異言を話すのみで、これらの人が理解できることばで話さなかったなら、教会が必要としている励ましも与えられず何の益にもならない。

[7-8]「笛や琴などのいのちのない楽器でも、はっきりした音を出さなければ、何を吹いているのか、何をひいているのか、どうしてわかりましょう。また、ラッパがもし、はっきりしない音を出したら、だれが戦闘の準備をするでしょう」

笛などの管楽器も琴などの弦楽器も音に意味のある変化がなければ何の感情も意味も伝えることができない。それらがはっきりしたメロディーを奏でていく時に人は理解できるようになる。8節のラッパとは軍隊用のラッパのこと。

[9]「それと同じように、あなたがたも、舌で明瞭なことばを語るのでなければ、言っている事をどうして知ってもらえるでしょう。それは空気に向かって話しているのです」

「それと同じように」とパウロの矛先はコリント人に向けられる。彼らが明瞭なことばで語らず、異言で語るならば誰とも意思疎通できず、それは空気に向かって話していることになる。コリント人たちは礼拝中にこのような異言でこぞって語ろうとするので、その混乱ぶりは大変なものであったらう。

[10-11]「世界にはおそらく非常に多くの種類のことばがあるでしょうが、意味のないことばなど一つもありません。それで、もし私がそのことばの意味を知らないなら、私はそれを話す人にとって異国人であり、それを話す人も私にとって異国人です」

異言を話すだけで、その意味が何も伝わらないならば、異言の賜物をどれほど誇ってもそれを聞く者との関係は全く異国人どうしに過ぎない。

[12]「あなたがたの場合も同様です。あなたがたは御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会の徳を高めるために、それが豊かに与えられるよう、熱心に求めなさい」

御霊の賜物を熱心に求める目的はあくまでも「教会の徳を高めるため」である。自分自身が目立つためとか他の人からほめられたいなどが目的であってはならない。教会が健全に成長し、神の御名がほめたたえられ、お互いの益となり、神のみこころがなされ、そのようにして教会の徳が高められる。コリント人たちはこれを目標に、御霊の賜物を熱心に求めなければならない。

[13]「こういうわけですから、異言を語る者は、それを解き明かすことができるように祈りなさい」

異言を語るだけで自己満足してはいけない。異言を解き明かすことができ、預言と

同じく教会全体の益となり、教会の徳を高められるようにしなさい。そのように祈りなさいとパウロは勧める。

コリント教会のことだけではなく、すべての信仰者も自分に与えられている賜物を誇り、高慢になったり、自己満足するのではなく、子なる神であられるのに、へりくだって、この世に人となって来てくださり、私たちの罪の贖いのために十字架の死に至るまで父なる神に従われた主イエス・キリストにならって謙遜になり、お互いに仕え合い、支え合い、教会の徳を高め合い、そのようにして神のみこころを全うしていくことが大切である。→ピリピ2:3~11